

指導資料

鹿児島県総合教育センター

芸術（美術）第40号

—高等学校，特別支援学校対象—

平成25年10月発行

デッサンの学習指導の工夫 —ICTの活用を中心として—

高等学校美術 I の学習指導要領において表現全体にかかわる学習として示されたデッサンの学習では，モチーフの観察において視点による認識の誤差が生じるなどの，学習指導上の課題が見られる。

そこで，本稿では，この課題を解決し生徒一人一人の基礎的スキルを高めるため，ICTの活用を中心としたデッサンの学習指導の工夫について述べる。

1 デッサンについて

(1) デッサンの概要

デッサンは，モチーフを観察し，心がとらえた視覚的特徴を画面に鉛筆などで表す単色の線画である。同様の画法

にスケッチがあるが，モチーフを短時

間で主眼点を描き写すスケッチに対し，デッサンは，モチーフをできるだけ正確に表現することに特徴がある。モチーフに内在している視覚的特徴には，構図，形，陰影などの造形的諸要素がある。これらの要素に関する知識を理解し，表現する技術を身に付け，この知識と技術の両方を使いこなす能力がデッサンの基礎的な技能である（図1）。

(2) 学習指導要領における取扱い

デッサンは，「A表現」全体にかかわる学習として，高等学校美術 I の内容の取扱いにおいて，中学校美術から取り扱われているスケッチに加えて，表現の指導に当たっての配慮事項として新しく示された。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

2 (1)

ア 見る力や感じ取る力，考える力，描く力などを育成するために，スケッチの学習を効果的に取り入れるようにすること。

『中学校学習指導要領解説 美術編』H20

2 内容の取扱い

(3) 内容のAの指導に当たっては，スケッチやデッサンなどにより観察力，思考力，描写力などが十分高まるよう配慮するものとする。

『高等学校学習指導要領解説 芸術編』H21

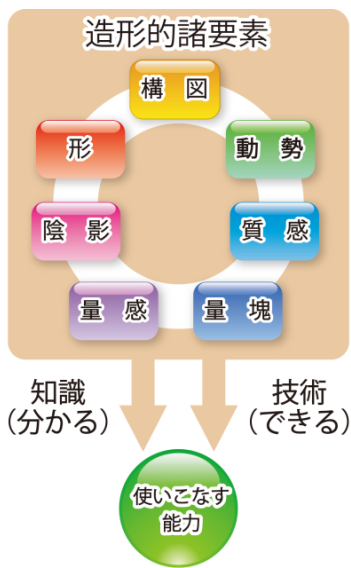


図1 デッサンの基礎的な技能

デッサンは、それぞれが表現の喜びを味わうものであるとともに、表現の発想や構想の場面から、完成、発表や展示、交流までのあらゆる場面で必要な学習である。また、それらは描写力だけでなく観察力や思考力などを育成するものでもある。したがって、表現全体の能力を育成するために、そのねらいを明確にし、基礎的な技能を十分に高める必要がある。

2 デッサンの学習指導上の課題

(1) 生徒の実態

デッサンの「造形的諸要素ごとの悩み」の割合を見てみると、「形」についての悩みが最も多く、「構図」、「陰影」についての悩みも多い（図2）。

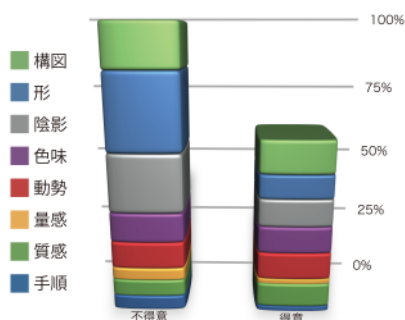


図2 デッサンの造形的諸要素ごとの悩み
県立奄美高等学校『デッサンの学習に関する意識調査』H20

このことから、まず、「形」、「構図」、「陰影」のとらえ方を生徒に理解させる必要がある。

(2) 教師の実態

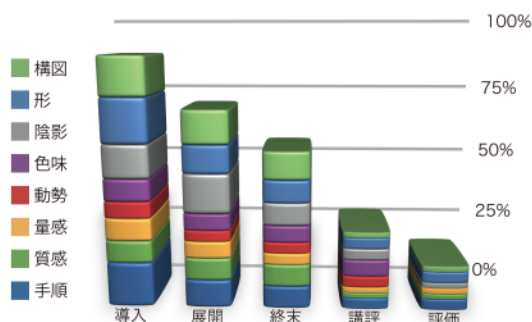


図3 指導が困難な「場面」と「造形的諸要素」
県内の高校美術教諭『デッサンの学習指導に関する意識調査』H20

デッサンの学習では、教師は多くの造形的諸要素の指導について困難さを感じている。特に、授業前半の解説を行う導入・展開の部分に困難を感じている様子が伺える（図3）。これらの困難さは、理解させるべき造形的諸要素が多いことに加え、モチーフを観察しながら解説を行う際に、視点の違いが発生することに起因する。一斉指導において、直接、モチーフを囲んで解説をすると、生徒たちの視点の違いからモチーフの傾きや比率などが異なって見え、個別指導においても教師と生徒の視点にはズレが見られる。そのため、共通認識を得ることが難しい（図4）。



そこで、デッサンの学習指導の工夫には、造形的諸要素について分かりやすく解説でき共通認識を得られるようICTで提示できる教材を、主に解説を行う場面で活用することが必要である。

3 ICTを活用した教材の工夫例

2の調査結果を基に、「構図」、「形」、「陰影」などのとらえ方を理解させるため、描画方法を考察し、ICTを活用して教材化した例を紹介する。

(1) 比率をとらえさせる工夫

測りたい部分の突端に鉛筆の先端を合わせ、末端に親指または人差し指を

合わせる。先端から親指までの長さを保ったまま、鉛筆を移動し他の部分に重ね、長さの比較を行う。これによって「この部分の寸法と、この部分の寸法は同じ。この部分の寸法は、この部分の寸法の2倍。」などの判別ができる(図5)。

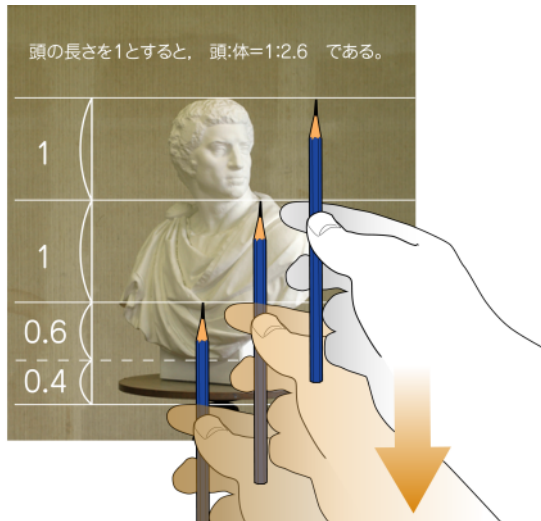


図5 鉛筆による比率のとりえさせ方

図6は、デッサンスケールを使った構図のとりえ方の手順と注意点をスライドにしたものである。これらにより描画方法の理解がより深められる。

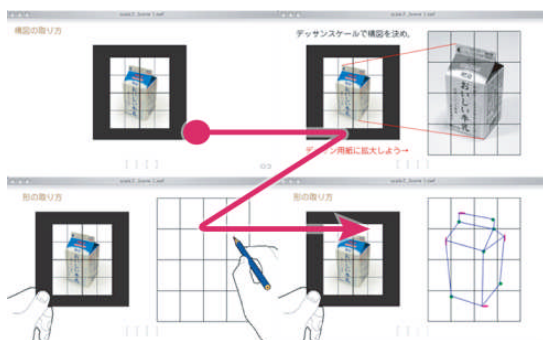


図6 構図のとりえ方スライド

(2) 形(傾き)をとらえさせる工夫

傾きをとらえるには、鉛筆をモチーフの測りたい部分の傾きに重ね、この角度が変わらぬよう、水平に画面上に移動し、

線を描く。この方法で特に「縦、横、奥行き」にできるY状の三方向の傾きを基準とすることで、モチーフの立体感を正確に測る目安となる(図7)。

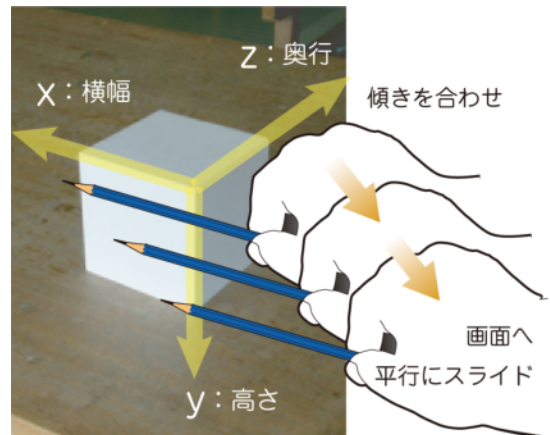


図7 鉛筆による傾きのとりえさせ方

図8は、鉛筆を使用し傾きをとらえる工夫を、写真やイラストなどの静止画で示した教材である。立方体及び胸像の傾きをとらえる画像をコマ送りのスライド形式で閲覧することができる。

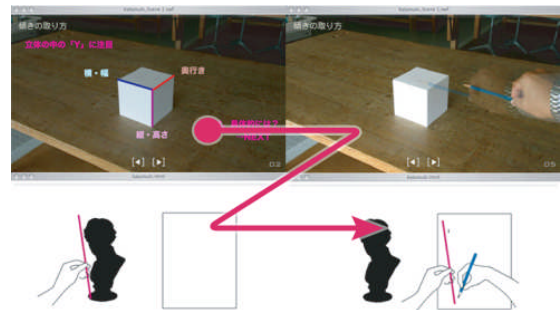


図8 傾きのとりえ方スライド

(3) 陰影を表現させる工夫

鉛筆デッサンには、直線の描画を重ねることで、階調の違いや線の方角性により表現の幅が広がるハッチング技法が有効である。線を描く方向について「タテ、ヨコ、ナナメ、ナナメ」という覚えやすいキーワードを添えることにより、陰影の表現に適した線描の方向と描画手順について、同時に定着が図られる(図9)。

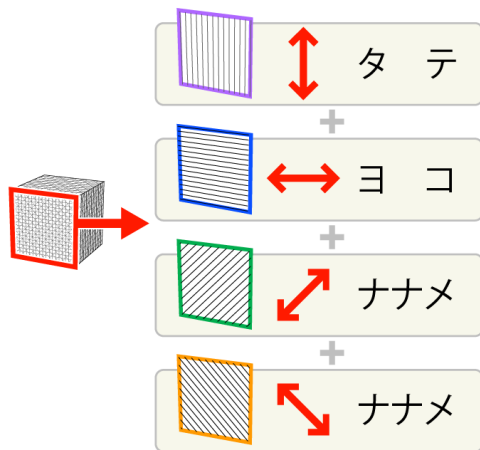


図9 ハッチング技法のキーワード化

(4) 描画方法や手順を理解させる工夫

図10は、教師が模範デッサンする様子を撮影し、スライド化した教材である。

再生ボタンを押すことにより、用具の準備から作品の完成に至る、デッサンの実際の描画手順を短時間で確認することができる。また、必要な場面での一時停止や巻き戻しなども可能である。これにより、手順や描画方法を具体的に理解しやすくなる。

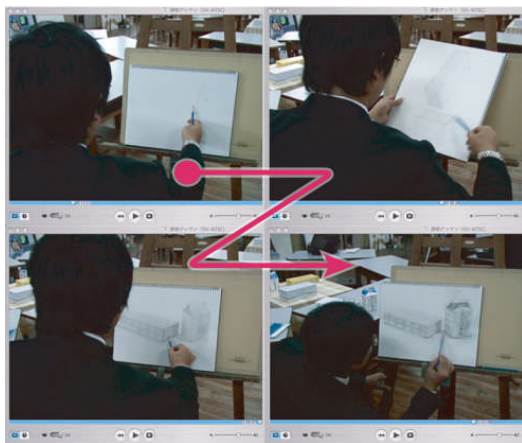


図10 実演動画教材

4 指導例

ICTを活用せずデッサン学習を行った時と、図6の教材を活用しデッサン学習を行った時の作品分析を行った(図11)。

作品から、ICT教材により、傾きの取り

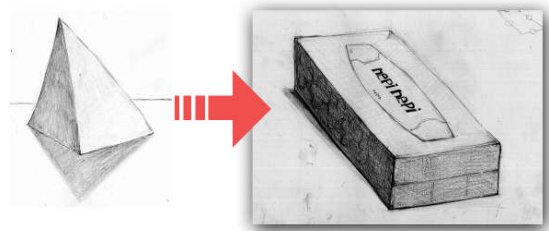


図11 ICT活用前後の生徒のデッサン作品比較 (左: ICT非活用学習時 右: ICT活用学習時)

方を具体的に理解できたことで、的確な形が取れるようになったことが分かった。また、ハッチングを理解し明暗の調子を増やした描画ができるまで技術の高まりが見られた。描画方法や手順を把握したことにより時間的余裕も生まれ表現の幅が広がった。

学習成果に関する自己評価の生徒全員の平均値を見ると、全項目について「ほぼ満足」した結果が分

かる(図12)。ICTを活用したことへの感想で

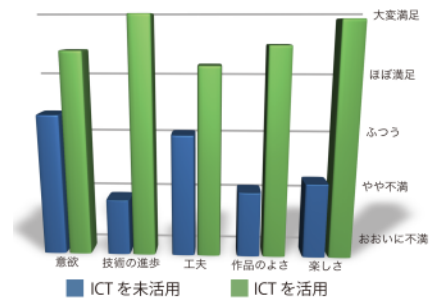


図12 学習全体についての自己評価

の感想で 県立川内高等学校『デッサン学習に関する調査』H24 は、生徒のほぼ全員が「分かりやすく、実技に自信がついた。とても役だった。」と記入しており「他の授業でも使ってほしい。」との意見も多かった。

ICTを活用することによって、生徒一人一人が表現の喜びを味わい、描画力だけでなく、観察力や思考力を培え、表現の基礎的技能が高まる、よりよいデッサンの学習が展開されることを期待している。

<引用・参考文献>

文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』H20
 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 芸術編』H21
 県立奄美高等学校『デッサンの学習に関する意識調査』H20
 県内の高校美術教諭『デッサンの学習指導に関する意識調査』H20
 県立川内高等学校『デッサン学習に関する調査』H24